有機農業技術のつぼ

作　　物　　名	たまねぎ
対応技術の項目	除草技術
	物理的防除
	機械除草

《情報収集先の経営概要等》

剣淵町　　赤トンボ農園（代表：池田伊三男）
経験年数 48年（うち有機年数12年）
経営耕地面積　　11.0 ha（全面有機）

たまねぎ	3.0 ha
大豆	4.1 ha
小豆	1.6 ha
にんじん	0.5 ha
緑肥	1.8 ha

労働力　家族２人
有機JAS認定の取得状況　H15年取得

問題点　除草の労力負担が大きかった

□　手取り除草では、50ａが限度だった。

□　除草機の導入により面積拡大が可能となったが、株間に残る雑草は依然として手取りのため、負担軽減が課題だった。

対　応　乗用型の機械除草機に深耕カッター・培土羽根を導入した　つぼ

□　次のとおり機械除草を実施した。

・１回目　　：従来型の除草カルチ（写真１）で除草を実施する。

・２～４回目：作業機【(株)キューホー「玉カルチ」】（写真５）に深耕カッター（写真２）を装着して除草を実施する。

・５回目　　：深耕カッターを培土羽根【(株)キューホー「土ピタ」】に替えて除草を実施する。

■　移植直後の株にダメージを与えないよう、初回除草時は深耕カッターを使用しない。

■　後半の除草は、培土羽根に替えることで、葉へのダメージを少なくし、雑草の発生を抑制する。

■　作業精度を高める工夫として、トラクターを使わず、乗用型たまねぎ移植機（みのる産業(株)）に作業機（玉カルチ）を取り付けて除草作業を行っている。（写真４）

写真１（除草カルチ）

写真２（深耕カッター）

写真３（培土羽根）

写真４（除草作業の様子）

写真５（作業機（玉カルチ）全体）

※ **対応技術活用上の注意点**

- 初回の機械除草は、苗が活着してからとする。
- 反転された土が株元にきちんと培土されるよう、培土羽根を調整･確認すること。

成　果　除草の労力負担が軽減され、栽培面積が増加した

□　栽培面積　　導入前　50ａ　→　導入後　３ha

- 除草効率が上がり、株間の手取り除草の労力負担が軽減された。
- 収量は、3.5～４t/10ａを維持している。

機械除草（５回目）後のほ場